

山梨県内の企業労働者における社会的スキルと職業性ストレスの関係について

主任研究者 山梨産業保健推進センター相談員 小田切陽一
共同研究者 山梨県立看護大学短期大学部助教授 森川三郎
山梨大学医学部看護学科教授 飯島純夫
山梨県立大学人間福祉学部助教授 坂本玲子
山梨労働衛生センター所長 金子誉
山梨産業保健推進センター相談員 平野雅己
山梨産業保健推進センター所長 佐藤章夫

1 はじめに

本研究は、山梨県内の企業労働者の職業性ストレスの実態把握を第一の目的とし、加えて企業労働者の社会的スキルと職業性ストレスおよびコーピングスタイルとの関係について検討した。

定義：対人関係を円滑に運ぶためのスキル

2 調査方法

2-1. 調査対象事業所および調査対象者

従業者が約200名以上の12事業所を抽出し、調査協力の承諾が得られた7事業所に医療機関の1事業所を加えた計8事業所（印刷業、通信サービス業、製造開発業、金融業、医療業）の常勤従業者2795名を対象にアンケート調査を実施した。

2-2. アンケート調査

アンケート調査は、職業性ストレス簡易調査票、Worker's Coping Behavior Scale（庄司・庄司 1992）KiSS-18（菊池 1988）に属性調査票（性、年齢、職種、職位、勤務年数）を貼付したものを無記名式調査票とした。2005年10～11月に、事業所の衛生管理担当部署に依頼して配布し、回答後は厳封状態で、回答者・非回答者が特定できない倫理的配慮下において回収した。回収状況は、総配布数2795に対して2268（回収率81.1%）、そのうち記入の欠落、不備等がない1729（有効回収率61.9%）（男性1397名、女性332名）であった。回答者の平均年齢（±標準偏差）は男性：39.0（±9.0）歳 女性：34.6（±9.7）歳であった。

職業性ストレス簡易調査票は、標準化得点を用

いた方法により解析し、出力結果のうち、ストレスサの有無とストレス反応の有無で表されるストレス区分と仕事の量的負担、コントロール、上司支援および同僚支援の尺度から作成されるストレス判定図を利用した。

コーピング調査票は、内容妥当性が確認されている「積極的 認知・行動コーピング(11項目)」、「回避的 認知・行動コーピング(10項目)」、「症状対処コーピング(11項目)」の各尺度の得点を用いた。

社会的スキル調査票は、「総スキル得点」と尺度構成項目である、「初歩的スキル」、「高度のスキル」、「感情処理のスキル」、「攻撃に代わるスキル」、「ストレスを処理するスキル」および「計画のスキル」の各領域別の得点、また田中・小杉(2003)の企業従業員を対象とした先行研究における「対人葛藤処理スキル」、「計画・管理スキル」、「コミュニケーションスキル」を下位尺度として採用した。

3 結果

3-1. 職業性ストレスの状況

仕事の量的負担・コントロール度、社内支援の状況から判定された健康リスクは、8事業所とも全国標準と同水準であった（図1）。

3-2. 社会的スキルと職業的ストレスの関係

ストレス反応を示している群（ST+）とストレス反応を示していない群（ST-）の2群間における総スキルおよび下位尺度別スキルの平均得点を比較したところ、ST+群の社会的スキル総得点(56.3)は、

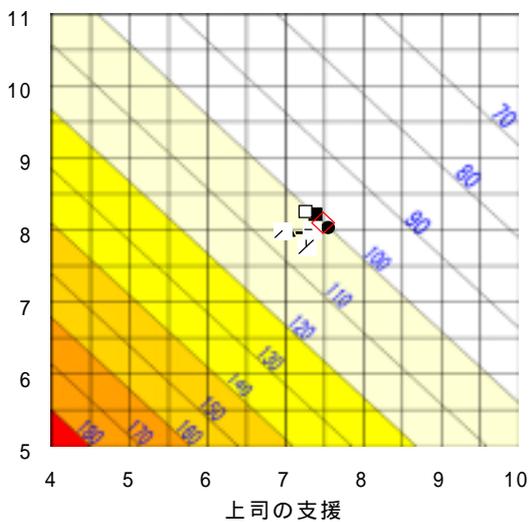
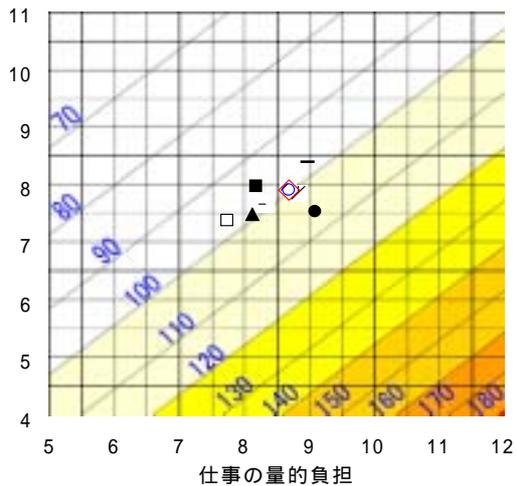


図1 職業性ストレスの状況(男女:判定図)
ST-群(59.9)と比較して統計学的に有意に低く、下位尺度別の得点(図2)も有意に低値であった。対人葛藤処理、計画管理およびコミュニケーションスキルもST+群で低値を示した。

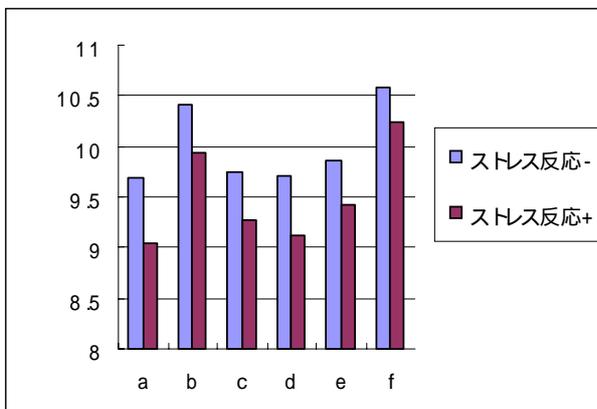


図2 下位尺度別社会的スキル得点
(a:初歩的スキル b:高度なスキル c:感情処理の

スキル d:攻撃に代わるスキル e:ストレス処理スキル f:管理スキル)

3-3. 社会的スキルとコーピングとの関係

社会的スキルを高値(66以上)・中値(65~51)・低値(50以下)群に分けてコーピングスタイルとの関係をみたところ(図3)、高値群ほど積極的認知行動得点が高く、逆に回避的認知行動得点は社会的スキルが低値群ほど高くなることが示された。

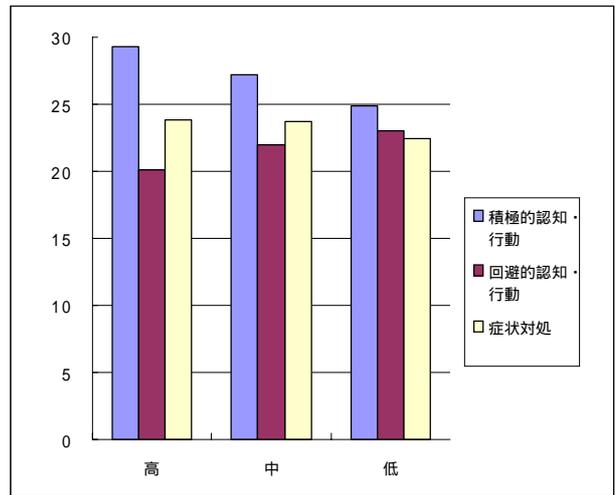


図3 社会的スキルとコーピングスタイル

4 まとめ

調査対象とした山梨県下の企業における職業性ストレスの状況はストレス判定図から判断される健康リスクのレベルは全国と比較して標準的なレベルであった。しかしながらストレス反応を現す者の割合は事業所間で差が認められた。

社会的スキルのレベルが低いことがストレス反応の表出と関連しており、コーピングスタイルも社会的スキルレベルが低いと積極的認知行動が採択されにくくなり、逆に回避的認知行動が採択される傾向が認められた。

以上の結果より、「対人関係を円滑に運ぶための」社会的スキルの維持・向上に向けた取り組みによってコーピングスタイルが変更され、ストレス反応の低減に結びつく可能性が示唆された。また社会的スキルの高さは職場内支援を受けやすい上司や同僚との関係性や相談機能をうまく活用できることなどを介して職業性ストレスの低減に結びつくことが考えられた。